The Japan Society of Educational Sociology

近代日本における職業軍人の意識形成
－大正・昭和初期における陸士・陸幼教育について－

廣田　照幸　（東京大学大学院）

1、課題の設定

日本の軍部、特に満州事変・日中戦争と戦争を拡大させていった時期の軍部に関しては従来二つのイメージで語られてきた。一つは軍人勅諭や武士道精神・日本主義等に関する思想史的なアプローチから導出される「天皇制イデオロギー」の信奉者としての軍人というものであり、他の一つはエリート研究や軍閥・派閥研究から導出される立身出世主義者としての軍人像である。しかし「天皇制イデオロギー」や「軍人精神」が述べる無私の献身の要請と、立身出世とは論理的に矛盾したもののように思われる。そしてそのことが思想的な側面を扱う前者のアプローチにおいては、規範としての「軍人精神」に重点がおかれざるをえず、表面に現れない個々の軍人の欲求の次元が見落とされるうえに、青年将校運動の担い手やトップエリート将校に対象が限定されがちである。一方、移動の量や行動を分析する後者のアプローチでは、「天皇制イデオロギー」が軍人の意識において占める位置が不明確になる。すなわち、イデオロギーの役割について過大評価、他方はそれの無視に陥る危険性があるといえよう。こうした二つのアプローチの不備を埋め、前述した二つの軍人像がどう重なるのかを明らかにするために、陸士・陸幼の将校生徒の教育を、教育する側の論理と、教育される側の意識という両側面から検討することで、陸軍将校の精神が実際どのように形成されたかを明らかにし、それによって日本の「ファシズム」の性格に関して一つの仮説を提示するのがここでの課題である。

2、陸士・陸幼の教育とその受容

陸士・陸幼の教育について具体的には　1°目的や規則・日常生活・訓話記録等から、どういう教育がなされたかを検討し、　2°作文や自伝・日記から生徒自身がそこでの教育をどう受け止めていたのかを検討してみよう。その結果次の二点が確認できよう。

（1）陸士・陸幼の教育はエリート意識を喚起するものであり、生徒はエリート意識を媒介として教育する側の示す秩序意識や「天皇制イデオロギー」を内面化した。「（良き）将校生徒たれ」という自覚の要求は、将校生徒の皇室との距離の近さ、「国軍の楨幹」としての名誉と責任の強調と結びつくことで、生徒の自発的同調を容易に引き出し得た。本報告の目的からすればここでは将校養成教育が徹底したエリート教育であったこと、換言すればすべての将校生徒がエリートとしてのプライドと責任感を「自覚」するべく教育されたことを確認しておけば十分であろう。

（2）陸士・陸幼教育で教え込まれる「無私の献身」は生徒の立身出世アスピレーションを冷却・否定するものではなっかた。学校生活の個々の場面における彼らの努力のエネルギーは、個人の立身出世の欲求－それは必ずしも官僚機構の上昇のみを意味するだけではなく、「英雄になる」「後世に名を残す」といったシンボリックな「上昇」をも意味するものであるが－から引き出されるものであった。教育における論理をたっどてみると、自我－家族－国家の系列で自我領を拡大することによって自己の自然な自発性（「国家我」）から国家のために献身努力す

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ることを要請している。注目すべきは、その同じ論理平面上において、自我の自然な「至誠」の発露が国家への貢献に向かう努力として再規定されることにより、立身出世が否定されるどころか、かえって称揚されている、ということである。生徒自身の意識においても作文や日記を検討する限り、無報酬の献身を誓う者はほとんどいない（ただし、昭和１０年代に入ると全く様相は一変する）。個人的な野心と家族の期待に応えることが「純忠報国の至誠」に基く将校の務めの中で達成されていくと考えられている。「一家ノ祖先ヲ崇拝スルモノハ、聽テ其ノ大宗家タル皇室ノ御先祖即チ皇祖皇宗ヲ崇敬シ奉リ、入リテハ則チ一家ノ為メ、出デテハ則チ国家ノ為メ其ノ本分ヲ尽シ、自己並ビニ祖先ノ名誉ヲ揚グル為メニハ、身命モ惜マザルニ至ル」※というふうに。立身出世の欲求はそれ自体は私的なものとして行為の基準として正当づけられるものではなっかた。しかし、家族への献身（孝行）－国への献身（奉公）と同値化されることで、結果としての立身出世は肯定される。われわれはここに、献身対象の概念化→個人の欲望の潜入→献身内容の恣意的解釈による欲望の合理化→献身行為による欲望の充足という「欲望自然主義」の形成（神島二郎）を、特に功名本位的なそれを見出すことができる。それゆえ、彼ら職業軍人の精神構造においては、立身出世の欲求と献身のイデオロギーを両方ともホンネとして抱え込むことが可能であった。意識や発言では「滅私奉公」・行動を見ると「立身出世」的打算という二重性はこのようなアスピレーションの水路づけによって生じたと思われる。

３、「立身出世」と「ファシズム」

陸軍の組織は俸給体系においても定限年齢に関しても、組織における上昇を動機づける構造となっていた。しかも明治３０年代～大正２年頃まで将校生徒を大量採用してきたことにより、大正半ば以降慢性的に昇進ルートが閉塞化してきた。このことは陸大を目指す競争の激化（陸大受験失敗者の士気低下）・「千年少佐・万年大尉」と呼ばれるような昇進の遅滞として問題化していた。またこの時期退職将校の生活難が深刻化していた。俸給体系が階級に応ずるものであることによって、昇進の遅滞－大尉・少佐での退職は恩給生活を苦しくしたが、不況・将校のプライド等により再就職もままならない状況であった。かくして大正末～昭和初期の将校の生活および将来の生活の見通しは危機に陥っていた（なお、本報告では触れないがこの点は将校の出身社会層の問題とも大きく関わっている）。満州事変はそうした危機をのがれる好機ではなかったかと考えられる。

４、まとめ

昭和初期の軍事的拡大の動きに対する将校組織内部での暗黙の支持、組織の末端に至るまでの「滅私奉公」イデオロギーの強調は、組織内の上昇を目指す私的欲求に基いているのではなかろうか。しかも将校自身はそれを利己的野心の実現としてではなく献身行為を通した予定調和的な社会的上昇という形をとる限り、自己の行動を「滅私奉公」として意識することになる。

すなわち、日本の近代化を推進する主要なエストであり続けた立身出世イデオロギーは「ファシズム」を推進する動因として大きな役割を占めるに至ったのではないだろうか。

※昭和２年予科卒　「敬神崇祖」

NII-Electronic Library Service